

06・クロエはわたしに甘すぎる

本編05『さんざん乳搾りされて遊ばれた後にいちやあま貝合わせセックス』から数時間後。  
とある年の晩秋。二十三時すぎ。

場所は主人公とクロエが暮らす家の寝室。

天気は雨。室温は二十四度。

主人公とクロエ、裸でベッドに入り、寝そべっている。

## SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0―7秒ほど流してSE2】

【建物の中から、外の音が聞こえる】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【場面転換するまで流し続ける】

SE2 主人公がベッドで動く音

【最初から最後まで流す】

● 正面 30センチ

「少し眠そうな、ぼーっとした声で。

つい先ほどまで眠っていたので」

あー……。凄い寝ちやつたね。

もう夜中だあ……。

【それでも樂觀的に。眠ってしまった者はもう仕方がないので】  
まあ、いつか。こういう日もあるよね」

〈主人公〉

「そうかしら……」

主人公、クロエの言葉に、少し納得が行かない様子で答える。  
今日は本当に何もせずに一日が終わってしまった気がする。

いや、散々いちゃいちゃは、いちゃいちゃだけはしたわけだが……。

●正面 30センチ

「【優しく樂觀的に。『時にはこういう日があってもいいだろう』と思っているので】  
いいじゃん。たまには。」

明日からはまた頑張るわけだし、今日はまだゆっくりしてようよ♥」

〈主人公〉

「……もう。」

クロエちゃんは、わたしに甘すぎるのよ」

●正面 30センチ

「【ちよつと納得が行かない、という感じで。

クロエ自身意外なので】

えー？」

そう。そうなのである。

主人公、

言われたクロエさん自身にはまるで自覚がないようだけど……クロエはわたしに甘すぎるのよ。

わたしは、もっといつでも厳しく己を律して。高い目標を掲げて生きていこうと思っているのに……。実際にそれができているかどうかはさておき、クロエはいつもわたしを甘やかすの。

『今のままで十分だよ』って言うみたいに、ダメなわたしでさえ肯定してしまうのよ。

と思いながら、クロエを見上げる。

するとクロエは目を泳がせ、何だか恥ずかしそうにした。

どうやら完全に自覚がないわけではないようだが、指摘されるとばつが悪いらしい。

### ● 正面 30センチ

「【も】もごと恥ずかしそうに言い訳をする。

その自覚はなかったの】

あっ……甘い、かなあ……？

したい事してたらこうなっちゃったから……。

ちよっと、わかんないかも。

【少し間をあけてから。

優しい声になって】

……でもね」

SE3 クロエが主人公の背中を『ぼん、ぼん』と撫でる音  
【最初から最後まで流す】

クロエ、『左 0センチ』に移動して話す。

● 左 0センチ

「優しく。クロエの本音を述べる」

あなたには、甘過ぎる人がいる位が、きっと丁度いいんだよ。

【※1回※ 耳にキスする】

ちゅ。

【とても優しく。主人公を安心させるような声で】

それに……。

あたしだけは……いつでもあなたの味方で。

絶対に優しくする人でいたいからね♥」

〈主人公〉

「……！」

だが、指摘を受けてなお、クロエはこのスタンスを貫くようだ。

それは主人公にとってとても恥ずかしく、時に申し訳ない事でもあるが……それ以上に幸せすぎる事だ。

どんな自分でも受け入れてくれる人がいる。そう思うと……『どんな事』は無理でも、やれるだけの事はやってみたくなるのだ。

クロエ、『左 0センチ』に移動して『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『そつとささやく。』

甘くそつと、ささやく」

大好きだよ」※

SE3 クロエがベッドで動く音

【最初から最後まで流す】

クロエ、一度少し離れる。

●正面 30センチ

「優しく、ゆっくりと」

じゃあ……もう一回寝ちやおつか」

SE4 クロエがベッドで動く音

「最初から最後まで流す」

クロエ、『左 0センチ』に移動して『無声音ささやき』をする。

●左 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「そつとささやく。」

甘くそつとささやく」

おやすみなさい……♡」

クロエが耳元で優しくささやく。

主人公は素直に頷くと……今日という日をここでおしまいにするように、眠りへと落ちていった。

ここでフェードアウトして終了。